

2012年10月

2012年、JICAの支援で化学の博士である旦那は日本へ行きました。半年が経った頃、彼は家族全員で日本に住もうと言い、私と娘（当時3歳）のために、在留資格を取る手続きをしました。私と娘が日本へ行ったのは10月でちょうど秋でした。10月の日本は涼しく、空も晴れていました。綺麗な空気を吸って、飛行機に乗っていた時の疲れも取れたような気がしました。

下の階の住人とのトラブル

日本へ行く前に、ひらがな・カタカナの読み書きと簡単な挨拶しかできなかったBinkさんは、日本語があまり理解できなかったため、日本に来てからトラブルが頻繁に起きました。

日本語のラベルが読めなかったため、特に見た目が似ている塩と砂糖、酢と油など間違っただけのものをお店で買ってしまうという事は頻繁にありました。しかしある時、そういうちょっとした間違い以上に大変なことが起きてしまいました。

ある日、私のうちの郵便ボックスに何かの手紙が入っているのを見つけました。当時、何が書いてあるか読めなかったため、特に気にせずそのまま放置していました。その日の夜、インターホンが鳴りドアを開けるとそこには下の階の方がいました。

彼は日本語でそして身振り手振りで私に何かを伝えようとしていました。私は「だめだめ」という言葉しか聞き取れなくて、一体どうしたらよいのか分かりませんでした。そこで、その住人の方の部屋へ様子を確認しに行ったら、濡れている床が目の前に広がっていました。

その後に分かったことですが、私が放置してしまったあの手紙は水道会社からのお知らせで、「パイプの修理工事が行われるので、洗面台の水を使わないでください」というようなことが書いてあったのです。私はそのことを知らなかったため、いつも通りに水を使っていたら、下の階の部屋に水が漏れてしまっていたのです。私は、彼に対してとても申し訳なく、後ろめたい気持ちでした。雑巾で水を拭き取るなど何とかしないといけない思いましたが、そのような状況でも、下の階の住人の方は怒らずに、私たちに「大丈夫」と言ってくれました。

ボランティア日本語教室に参加 します

初めのころ、Binhさんは一人で出かけることはできず、話せる相手もあまりいなかったので心細いと思うこともありました。

ベトナムにいるとき、日本はとても静かだと聞いていました。日本で住み始めると、想像を超えた静寂さで心細かったです。娘は每晚8時半か9時頃には寝付きますが、主人は毎日夜遅くまで研究所にいるため、ひとりで主人の帰りを待っている間、外を見ても誰もいなくて、何の音も聞こえず、周りが静かすぎて、不安に掻き立てられました。

Binhさんは大学校内にあるボランティア日本語教室に参加することで、ほかの人と交流して話す相手もできました。そこで気持ちを切り替えることができ、日々の不安を解消できました。

ボランティア教室では、日本の文化や行事を紹介してくれました。例えば、ひな祭りの時には、先生は自分のひな人形をクラスに持ってきて私たちに見せてくれました。先生のおかげで、日本のだいたいの年間行事を体験することができました。そして、先生はよく週末に「どこか行きましたか」、「何かをやりましたか」、「日本の文化について何か気づいたことがありますか」など聞いていました。それは生徒に日本語の練習をさせながら、日本にどれだけ慣れてきているかを確認するためでもありました。





日本語を勉強し続けられるモチベーション

Binhさんによると、日本語を勉強し続けられる理由は「自分の成長が実感できたから」ということです。勉強を続けることによって、ほかの人に頼らなくても日本語で出来ることが増えたそうです。

最初、日本で生活するから日本語を勉強しないといけませんでした。ただ勉強すればするほど、やる気を感じました。日々新しいことを習えば、日本語でできることも少しずつ増えてきます。それは自分のモチベーションにつながりました。

以前は、日本語があまりできず医者と会話でやり取りすることができなかったのですが、子供を病院に連れていくときは、毎回日本語ができる知人に付き合ってもらっていました。また、幼い子供は体調が頻繁に変わり、突然夜中に具合が悪くなることもありました。知人がいい人でいつも気軽に手伝ってくれましたが、その人も一日中暇であるわけがないし、夜の遅い時間に通訳をお願いしたときも知人は何も言いませんでしたが、やはり私は迷惑をかけているなど感じました。日本語でいたい会話ができるようになってからは、ほかの人に頼らずに一人で病院に行けるようになり、医者に伝えたいことを伝えられ、薬の説明も分かるようになりました。



日本語教師になりました

ベトナムに帰った後も、Binhさんの日本語への情熱は冷めません。Binhさんは前の仕事を辞めて、日本語教師になりました。現在、送り出し機関で実習生に日本語を教えています。

日本で働くには、「日本語能力はもちろん、観察能力も身に着けてほしい」と学習者に言っています。例えば、職場などで納得できないルールがあったら、よく観察して自分に「なぜ」という質問をするとよいです。根本的な理由が分かったり理解できるようになると、その不満は次第に解消され、ルールに従って行動できるようになることもあるからです。

これは私がある日、日本で体験した話です。

私が通っていた日本語教室の建物の1階には図書館があり、教室は2階にありました。同じ建物の中にあるのに、図書館のスリッパと教室のスリッパとは別々です。教室から図書館に移動したら、スリッパを交換しないとイケません。最初、どうして使い分けしないとイケないのかが分からなくて、「少し手間がかかるな」と思っていました。そして、周りの様子を見てみるとあることに気がきました。図書館の床は木材でできていて、教室の床とは違うという点です。図書館では、子供たちがよく床に寝転がって絵本を読んだりしています。図書館専用のスリッパを使う理由はそこにあるのではないかと考えました。理由が分かると、毎回スリッパを交換することは当然のように感じ、めんどくさいとは思わなくなりました。

あなたへのヒント

Binhさんがうっかりしていて、下の階へ水漏れさせてしまい住人の方に迷惑をかけてしまいました。しかしそのことがあってから、Binhさんの家族とその部屋の住人の方は友達になり、一緒に買い物に行ったり、お裾分けしたりするほど仲良しになりました。

「スアン日本へ行く」の第6話でスアンにも近所の方とトラブルがありました。

ただし、話の展開はBinhさんの話ストーリーとは違います。スアンの近所の方の佐々木さんは厳しい人です。スアンは佐々木さんに正しいゴミの人の教えてもらいましたが、「佐々木さんに教えてあげました」と言ってしまい、それで彼に怒られました。スアンは自分の日本語が間違っているかもしれないとは感じていますが、正直どこが正しくないのか分かりません。

では、自分が話した後に相手の反応が良くなかったとき、話した日本語が間違っているかどうかを確認したいとき、どうすればいいでしょうか。

スアンはどのように間違いを確認したのか、是非番組をご覧ください。

<https://www.hikidasu.jp/go.jp/corner/drama/06/>



* 「スアン日本へ行く！」は国際交流基金が作成した日本語学習番組「ひきだすにほんご」の一つのコナーです。